

38. 与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。」

## 説教

これは、イエスさまが、十二弟子を選んだ後、彼らを教育した教えの一節です。

ここでイエスさまは、山上の説教のように、どのような者が真に「幸い」であるのかをまず教えた後、律法全体の要約として「あなたの敵を愛しなさい」と教えます(27)。しかし、この「敵をも愛する愛」は、当然、罪人である人間は生来持ちあわせているものではありません。それは、天地宇宙と私たちを造られた神だけが持つておられるものです。それで、イエスさまはこう言われます。「あなたがたの天の父が憐れみ深いように、あなたがたも、憐れみ深くしなさい。」(36)そして、その具体的なあり方として、「さばいてはいけません」、「人を罪に定めてはいけません」、さらには「赦しなさい」、「与えなさい」と教えます。こうして、憐れみ深い天の父の愛をあらわす具体的なあり方として、イエスさまは「与えなさい」と教えるのでした。

私たちがよく注意しなければならないことですが、「与えなさい」とは、あくまでイエスさまが弟子たちに教えたものです。イエスさまが、イエスさまを信じるイエスさまの弟子に教えたものです。ですから、イエスさま以外の誰かが、他の誰かに教えるべきものではありません。例えば、私たちが、自分の家族とか、友人、知人に「与えなさい」と教えるべきものではありません。このような教えを聞く時、多くの場合、私たちはすぐに曲解します。つまり、聖書で「与えなさい」とのみことばを読むと、それを自分自身に当てはめずに、自分以外の誰かにあてはめるのです。イエスさまは、弟子であるこの私自身に教えてくださっているのに、自分の責任は棚に上げて、自分以外の誰かに当てはめます。そうして、「あの人は与えていない」とか、「あの人は私に与えてくれなかった」、「ケチな奴だ」などと、「与えない」人をさばくのです。

このような聖書の読み方は根本的に誤っています。だから、この「与えなさい」とのイエスさまの教えは、「さばいてはいけません」とセットになっているのです。他人事として「与えなさい」との教えを聞きながら、いい気になって人をさばくのではなく、自分のこととして「与えなさい」との教えを聞かなければなりません。イエスさまが「与えなさい」と教えたことを、自分のこととして聞くのではなく、他人に当てはめて、「与えない」人を「さばく」ことは、他人に犠牲を「強いる」ことに他なりません。

哲学者の高橋哲哉氏は、著書『犠牲のシステム、福島・沖縄』で、国家権力には国民に犠牲を強いる危険性が絶えずあることを指摘し、批判しています。これまでは沖縄が、そしてこの度は、原発事故で福島が、国策の犠牲になりました。そして、このことは、国家の犠牲となった死者を「英霊」と称えて顕彰し、さらに新たな国家の犠牲者を生み出すシステムである「ヤスクニ」思想に通じるものだと高橋氏は指摘します。

かつて、日本による不法な強制併合がなされた朝鮮で、「三一独立運動」という国民挙げての正当な抵抗運動がなされた時、その意味を理解しない組合教会の朝鮮派遣宣教師・渡瀬常吉は、「朝鮮の基督教徒達が『右の頬を打つものには亦た左をも回』す基督教の『真精神』を理解せず、『未だ基督教の新生命を握っていない』から、朝鮮の信徒たちが「騒擾」に加わったのだと非難しました。そして、「詭激極端なる思想行動」である独立運動の鎮圧に積極的に協力します。全国各地で講演会を催し、三一運動で収監された基督者を「教誨」して回りました。

このようなことはすべて、愛を人に「強いる」ことに他なりません。イエスさまの教えをイエスさまの教えとして聞くことなく、自分があたかもイエスさまであるかのように、「愛しなさい」「与えなさい」と他人に教えた上で、「与えない」人をさばいて「与えなさい」と強制することは、他人への犠牲の強制であって、してはならないことです。かつて日本の国家が隣国に強制したことであり、同時に、未だに沖縄や福島で行っていることに他なりません。

「与えなさい」とは、他の誰でもない、イエスさまが言われたことです。それは「さばいてはいけません」とのみことばとセットで聞かなければなりません。神以外に誰も人をさばくことはできません。人をさばく口実として、「与えなさい」を口にしてはならないのです。これは、人の言葉ではなく、神のことばなのです。

前置きが長くなりましたが、以上を前提としながら、イエスさまのことばを学びましょう。

イエスさまは言われます。「与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。」直訳はこうです。「与え続けよ。そうすれば、あなたに与えられるであろう。」そして、「あなたに与えられる」の具体的な解説として、こう説明されます。「人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。」つまり、人に「与える」と自分も「与えられる」と言うのですが、それが具体的にどのように「与えられる」のか、実に生き生きとイエスさまは描写なさるのです。それは「量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれる」とあって面白いのです。

これによると、まず、「人々は量りをよくして」くれます。「量り」は「量り、尺度、力量、限度」といった意味です。私たちには、人を量る「量り」があります。妻、親、子、孫といった身内に対する「量り」と他人に対する「量り」は異なります。親や子にはこれぐらいしてあげるけれども、赤の他人にはここまで、と限度を定めます。そして、他人の中でも、この人にはここまでしてあげるけれども、この人にはここまでしかしてあげないと、それこそランク付けします。イエスさまは、私たちが「与え続ける」ことでその相手は「量りをよくしてくれる」と言います。人に何も与えないなら、相手もまた同じように何もくれないのですが、「与え続ける」ことで、相手もまたその度に心開き、私に対する「量り」を良くして、私に与える「限界量」を増やしてくれるというのです。

次の「押しつけ」は「捕まえられる」、「揺すり入れ」は「揺すられる」、「あふれるまでにして」は「注ぎ溢れさせられる」の意味で、「ふところに入れてくれる」の直訳は「ふところへと与えてくれるであろう」です。つまり、人に気前よく「与える」人には、人々が逃げるその人を「捕まえ」、頼むからもらってくれと「揺すり」、「溢れるばかり懐にガバガバと注ぎ入れてくれるであろう」とイエスさまは言われるのでした。

最後に、イエスさまは、その理由として「あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらいからです」と総括します。直訳は、「というのは、今彼を量っているその量りで、あなたがたも量り返されるからだ」で、今現在、人にどのように振る舞っているかは、そのまま未来に自分が人から受ける待遇そのままを意味すると言っているのです。ケチな人はケチにされ、気前よく与える人は気前よく与えられます。自分さえ良ければ人はどうなっても構わないという人は、人からもそのようにされます。

要するに、人にしたように、自分もそうされるのです。殺す者は自分も殺され、さばく者は自分もさばかれ、罵る者は自分も罵られます。赦さない者は自分も赦してもらえません。自分は赦さないのに自分だけ赦してもらおうということはあり得ません。これに対し、人を愛する人は、自分も人から愛されます。人を赦す人は、自分も赦されます。人に与える人は、自分も与えられるのです。それも豊かに与えられます。別に欲しくないからと逃げても捕まえられて、揺すられ、溢れるばかりに懐へ入れられるのです。

それでイエスさまは、どうせならそうなるようにと私たちに教えます。イエスさまは、この真理を単に私たちの人生の教訓として教えるのみならず、積極的に「与えなさい」と命令形で命じます。神と人にケチって、シケ

たケチな人生を生きるのではなく、神と人ともに豊かに「与え続け」て、神と人から「溢れるばかりに豊かに与えられる」人生を生きるように、「与え続けなさい」と命じるのです。

そして、その源泉は父なる神にあります。私たちの天の父は憐れみ深い方です。私たちに一切を与えてくださいました。私たちの持ち物もいのちもくださいました。私たちのもので、父なる神からもらわなかったものは、何一つありません。すべては天の父からいただいたものです。これほど私たちに豊かに与えてくださった神は、貧しくなったかと思いきやそうではなく、永遠に豊かであられます。「与えよ」と命じられたイエスさまもまた、私たちに御自身の血と肉を与え、永遠のいのちを与えてくださいました。しかし、それほど惜しみなく私たちに御自身の一切を与えてくださったイエスさまは、今や、天地宇宙とその中に満ちる一切を永遠に所有しておられます。

だから、言われます。「与え続けなさい。」